❋❋❋ 記　事 ❋❋❋

消　息

第三六回 国際医学史会議

一九九八年九月六日から十一日までチュニジアで開催された、第三六回国際医学史会議に出席したので、個人的な見聞になるが概要を報告する。

この会議は一九二〇年に設立され、隔年に開催されている。前回はギリシャのコス島で開かれ、次回はアメリカのテキサスが開催地である。日本からは早く故小川鼎三先生が参加されたと聞くが、現在まで毎回数人ずつ出席していたようである。今回の参加者は、国際学術委員会の一員である酒井シヅ先生、羽生順一先生、海江田純彦先生、それに私の四人で、酒井先生は「医学教育における医学史」のシンポジウムで報告された。

会場は、首都チュニスに近い地中海沿岸のリゾートホテル、カルタゴ・パレス・ホテルで、学会の主なテーマは、アラブ・イスラム医学史、公衆衛生、医学教育、医学倫理などであった。とくにこの年はイブン・ルシュド（アベロエス）の八百年祭にあたり、アラブ医学が重点で、そのことは講演やポスターセッションの会場が、アベロエス、イブン・アル・ジャザール、エッザハラーウイ(アルブカシス)、アビセンナなどアラブ医学者の名前で呼ばれたことにも現れていた。

会議は、チュニジア政府の強力な支持のもとに開催され、開会式では総理大臣エル・カルイ博士が開会演説を行った。日程は、九月六日（日）登録、七日（月）開会式と学術発表、八日（火）、十日（木）、十一日（金）学術発表、九日（水）公式観光となっており、レセプションなど多くの社交プログラムもあった。

公用語は英語、フランス語、アラビア語で、スライドは英語と指定されていた。チュニジアがフランス語圏なのでフランス語による発表が多かったが、同時通訳の設備が十分でなく、私には演題の全部は理解できなかった。しかしこの会議に参加した最大の目的であるアラブ医学研究の現況は、充分に知ることができた。

感銘を受けたのは、チュニジアの人たちが自国の医学の歴史に対して持つ誇りと熱意であった。カイルワン医学校の指導者であったイブン・アル・ジャザールが会議のシンボルに選ばれ、ポスターセッションに会議総裁アンマル教授の「イブン・アル・ジャザールとカイルワン医学校」という発表があり、英語とフランス語で出版されている同名の著書が、参加者全員に贈られた。

演題の全部は理解できなかったが、アラブ医学研究が新しい時代にはいっていることをはっきりと感じた。それは、ヨーロッパ人の手を通る前のアラブ医学が研究対象となり、ま

たアラブ諸国の医史学者によって活発な研究が行われていることである。そのあらわれとして、アラブ医学者の業績はほとんどがアラブ名で呼ばれ、欧米の学者のスライドにもアラ

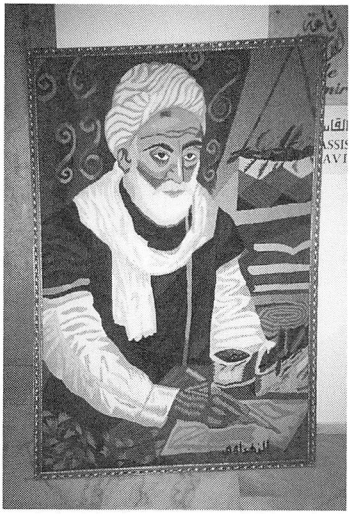

写真２　同名の演説会場前に置かれたエッザハラーウイ（アルブカシス）の肖像

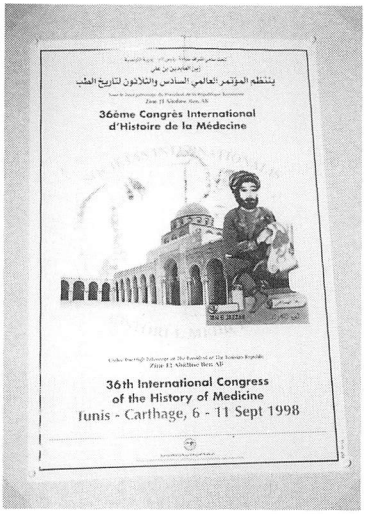

写真１　第36回国際医学史会議のポスター

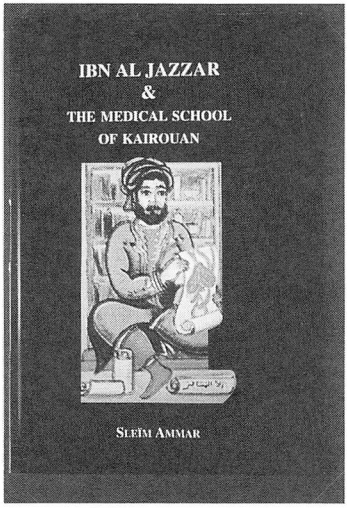

写真４　S. Ammer 教授の著書『イブン・アル・ジャザールとカイルワン医学校』

写真３　ラーゼスと名付けられた事務局の一室の銘板

ビア語が書かれていた。しかしアビセンナ、アベロエスなどのラテン名はそのまま使われ、発表ではバフティシュー、マサワイヒなどの名も聞かれた。チュニジアに最初にアラブ医学を移植したのはマサワイヒであったという。医学者の中ではアビセンナが高く評価され、エッザハラーウイ（アルブカシス）も重視されていた。

国際学会の一面は、他の国々の研究者との交流にある。私自身、シンコーナの研究でたびたび引用した論文の著者ゲラ教授（スペイン）に会うことができたし、ヘブライ大学のコテック教授にマイモニデスのことを質問して、きびしいが有益な教示を得ることができた。

会場に出店していた書店でアラブ医学・科学史の二、三を入手したが、アラブ医学史の古典はなかった。店員に聞いたところ、左記の照会先を教えてくれた。ここでは、アラビア語だけでなく、フランス語で書かれた現代医学のシリーズなども出版している。

ARAB CENTRE FOR MEDICAL LITERATURE
P. O. Box 5225, 13053 Safat, KUWAIT

学会が終わった翌日、一人で古都カイルワンを訪れた。有名なモスクの二、三を見ただけだったが、郊外にあるイスラム博物館で、羊皮紙に書かれた古いコーランの手稿を初めて見て感激した。

（泉　彪之助）

「宗田文庫披露式」報告

本学会の常任理事にあられた故・宗田一先生のご蔵書が、京都の文部省大学共同利用機関・国際日本文化研究センターに一括して寄贈され、その宗田文庫披露式が同センターにて一九九八年九月二十五日に行われた。

宗田先生は一九八九年から同センターの共同研究員として九六年七月に亡くなられるまで研究活動を続けられ、生前より将来は蔵書を同センターに寄贈して広く公開利用されることを希望されていた。その遺志により、ご遺族が自宅にあった蔵書類の寄贈を申し出、受け取った同センターは松田清客員教授（京都大学教授）を中心に蔵書の調査を開始し、本年九月に同センター編刊の『宗田文庫仮目録』五八五頁を完成させた。

寄贈されたのは書籍一万三千百七冊、画像資料・古地図など三百六十六点など。室町期の古医書写本から明治期の洋装本、また各種文書・一枚刷・雑誌類などがある。分野も漢方・蘭学・洋学ほか、およそ日本の医薬を中心とした医事文化の全分野におよび、宗田先生の学問の深さと広さを反映していた。

当日の披露式には同センター関係者のほか、本学会や洋学史学会など各界からの出席者があった。ご遺族から寄贈目録が河合隼雄同センター所長に手渡され、ご遺族の挨拶と各代表の祝辞の後、同文庫の調査整理にあたられた松田清教授よ